タイトル　『ヒッチハイク』

著者名　中後歩

あらすじ
底辺ユーチューバーの颯太とケンゾーは動画の企画でヒッチハイクを始めた。二人はコンビニの駐車場で出会った咲夜という、どこか謎めいた女の車に乗せてもらったが、咲夜は自分の目的地をなかなか明らかにしない。颯太が眠りから覚めたのと同時に女の車は停車したが、それは思いもよらない場所だった。

文字数４９９７字

「またダメだった」
　近づいてくるケンゾーはわざとらしく肩を落としていたが、実際は大してがっかりしていないみたいだった。それは彼のニヤニヤしている目を見ればわかった。
「お前の風貌がやばいからだよ」
　颯太はケンゾーの肩まで垂れている髪を引っ張った。
「こんな汚らしいロン毛男がいきなり『車に乗せてください』って言ってきたら、誰でもビビるわ」
「ひどいこと言うなー」
「事実だよ」
「まあ、また次の車を待とうや。時間ならいくらでもあるんだし！」

　颯太とケンゾーは底辺ユーチューバーだった。彼らは大学で知り合った。どちらも不真面目な学生で、仲良く一留した。
　大学５年生になったとき、ケンゾーが「ふたりでユーチューブを始めないか」と颯太を誘った。
　ケンゾーと比べると、颯太はまだしっかりした性格をしていた。しかし彼も怠惰から留年していたし、このままダラダラと自分が普通の社会人になる未来が想像できなかった。だから颯太は「いいじゃん」とケンゾーの誘いに乗った。
　そんなわけでふたりは就職活動を一切しなかった。大学を出てからは、バイトでなんとか食い繋いできた。狭い六畳間に一緒に住んで、賞味期限ギリギリの菓子パンばかり食べていた。
「ヒッチハイクでどこまで西に行けるか」という動画の企画を持ち出したのも、ケンゾーの方からだった。颯太はまたしても「いいじゃん」と答えた。

　今彼らは国道沿いのコンビニにいた。なんやかんやしているうちに２時間近く同じ場所にいた。タバコを吸って、スマホをいじって、新しい車が駐車場に入ってきたら交代制で声をかけた。そしてあっけなく断られた。その繰り返しだ。
　少しして、白のワゴン車がコンビニに入ってきた。彼らははっと目を上げたが、すぐには飛び付かなかった。中からサングラスをかけた女性が出てきたらだ。年は三十代半ば。しかも一人ドライバー。今までの経験から考えると、車に乗せてくれる確率は相当低い。
「まあ、ものは試しだろ。今度は颯太の番だ。ほら、行ってこいよ」
「でもなー。見た目からして、なんか無理そう」
　ふたりが灰皿の前でダラダラしていたら、結局女の方からこちらにやってき

た。女はライターでタバコに火をつけた。颯太たちのことなんて目にも入ってない様子だった。
　ケンゾーが肩で颯太の背中を押した。
「ほら、早くいってこい」
　颯太は嫌々ながらも話しかけた。
「すみせん。あのー、突然申し訳ないんですけど、僕たちユーチューバーで、いまヒッチハイクしてて……」
　颯太は手短に自分たちの企画を女に説明した。突然のことに、女は最初はびっくりしているみたいだったが、段々と表情は和らいでいった。
「つまり、あなたたちはとにかく西に行きたいのね？」
　女はサングラスを取って、彼らふたりのことを眺めた。
「はい。その通りです」
　手応えを感じながら颯太は答えた。横にいるケンゾーは押し黙って、ただ女の表情を伺っていた。
「わかった。いいよ。ちょうど私が向かっているところも、方角でいうと西の方だったし」
「マジっすか」とケンゾー。
「まじよ。ただ途中でいくらか寄り道するけど、それは平気よね」
「もちろんっす」
「じゃあ決定」女は指を鳴らした。「まずはここで買い物済ませちゃうね。そのために駐車したんだがら」
　女はコンビニに入ると、カゴを手に取った。
「あなたたちは学生？」
「いや、もう卒業しました」
「あ、そうなの。なら色々大変そうね」
「まあ、はい。そうっすね」
　ケンゾーは照れながら答えた。
「ついでにあなたたちもなんか買ってく？　ちょっとだけなら奢ってあげるよ」
「いや、そこまでしてもらわなくても」と颯太。
「いいの。気にしないで。どうせたくさん買うから。少しぐらい会計高くなっても平気」
　ふたりは女の厚意に甘えることにした。ケンゾーはメロンパンとエナジードリンク、颯太はホットスナックのチキンと天然水。
「めっちゃいい人だな」
　ケンゾーは女が違う棚を見ている隙に言った。
「普通に綺麗な人だし。な？　やっぱり声かけてよかっただろ？」

「たしかに」
　颯太は認めざるを得なかった。
「ほんと、すごくいい人っぽい」
　彼女の買い物カゴにはすでにたくさんの商品が詰まっていた。上から見えるだけでも、パン、おにぎり、ペットボトルのジュース、少年漫画の最新刊やウエットティッシュ、それに目薬まで入っていた。
　ふたりはコンビニ店員が大量の商品を袋詰めしていくところをじっと見守っていた。改めてものすごい買い物だと思った。
　その時、店員がカゴの底から、けばけばしいデザインの小箱を取り出して、側面のバーコードを読み込んだ。それを見て、颯太たちは思わず目を合わせた。なんとその箱の正体はコンドームだった。
　ケンゾーはニヤニヤしながら、こっそり颯太の小脇を突いた。
　でも颯太は真顔のままだった。

　彼らを乗せた車は西に進んだ。ふたりは後部座席に並んで座り、カメラを回した。
「今回も無事ヒッチハイク成功しました〜。おまけにコンビニで軽食まで買ってくれた、親切なドライバーは……」
　ケンゾーはそこで言葉に詰まった。
「あ、やべ。まだ名前聞いていなかった。何さんでしたっけ？」
　撮影していた颯太は運転席の女にカメラを向けた。
「さや」女は振り向いて答えた。「花咲く夜で咲夜っていうの」
「咲夜さん！　素敵な名前ですね！」
「ありがとう」
「咲夜さんはどちらに向かう途中で俺たちを拾ってくれたんです？」
「んー。それは内緒。着いてからのお楽しみ」
　女はどこか含みのある口調で言った。
「おお。それはそれで面白くて、いいですね！」
「でもまだまだ時間かかるから、ゆっくりくつろでいてね」
「いやー、少しでも西の果てに近づけたら俺たちまじ嬉しいっす！」
　それからケンゾーは運転席ばかりを映している颯太の足を軽く蹴った。
「なあ？　まじありがたいよな」
「ああ、ほんと……」
　颯太は我に返って、慌ててカメラを女からケンゾーに戻した。
「俺たち咲夜さんには本当に感謝してます」
　女はバックミラー越しに微笑んだ。サングラスの下の唇がわずかに歪んだ。

　それから一時間、女はノーストップで運転を続けた。
　颯太とケンゾーは動画用のトークを撮っていたが、二人とも昨晩のバイトの疲れもあって、次第にウトウトし始めた。女の運転は滑らかで、車内は暖房が効いていた。
　さらに一時間も経つと颯太は完璧に寝落ちしていた。車が停車したのにも気づかず、ケンゾーに叩かれてやっと目覚めた。
「着いた？」
「いやまだ」
　ケンゾーも眠そうで、あくびをしながら答えた。
「今コンビニ。咲夜さん一服するらしい。俺は外出るけどお前は？」
　颯太は窓の外を見た。いつの間にか空は暗くなり始めている。
「いや俺は眠いからいい」
「ほんと咲夜の車まじ眠くなるよな」
　再びケンゾーはあくびをした。
「花の匂いのせいかな」
「はな？」
「助手席に立派な花束あったじゃん」
「まじ？　知らん」
「まあ、ともかく俺は喫煙所行ってくんね」
「おお。いってら」
　颯太はひとり車の中に残って、ふたりがタバコを吸っているところを窓越しに眺めた。何やら仲良さげに談笑している。ケンゾーの人当たりの良さは颯太も感心するほどだった。誰とでもすぐ仲良くなれる。
　それから颯太は身を前に乗り出して、助手席を覗いてみた。たしかにケンゾーの言った通り、結婚式に似合いそうな綺麗な白い花束がそこにあった。颯太は今までまったくそれに気がつかなかった。改めて意識すると、たしかに女の車は花束の甘い匂いに包まれている。
『でも』と颯太は思った。
『なんで今まで気づかなかったのだろう？』

*

　颯太ははっと目を覚ました。一瞬自分がどこにいるのかわからなかった。外はもう完璧に夜だった。満月が雲の影から見え隠れしている。車はいつの間にか動き始めていた。目を擦りながら、颯太は横にいるケンゾーに目を向けた。

彼は寝ていなかった。しかしどこか様子が変だった。恐ろしいものを見て、そのまま表情が固まってしまったような不気味な顔で、ただ正面を見つめていた。口は半開きで、顔全体の筋肉が緩んでいる。
『俺が寝ている間に何かあったのか？』
ふと視線を感じて目を上げると、バックミラー越しに女と目があった。でも相手はすぐに逸らした。
「すいません。熟睡しちゃって」
颯太は女に声をかけた。
女は車道に目を向けたまま、頷いた。女はもうサングラスを取っていた。
「でもちょうどよかった。そろそろ目的の場所に着くところだから」
「それはよかったです」
そのとき、ケンゾーの体が急にぶるっと大きく震えた。
「おい、さっきからどうしたんだよ」
あまりに様子が変なので、思わず颯太は小声で尋ねた。
するとケンゾーは掠れた声で答えた。
「俺は、俺は、聞いたんだ……」
目の焦点がおかしかった。明らかにいつものケンゾーではない。
「聞いた？　何を」
「俺は、すべて、聞いた。喫煙所で……」
「どういうこと？　お前大丈夫か」
「俺は、すべてを、聞いたんだ……」
ケンゾーは人形のように同じ言葉しか繰り返さなかった。
颯太が怪訝に思っていると、車はいきなり停車した。どうやら車はいつの間にか野外の駐車場に入っていたらしい。女はエンジンを止めた。そしてなんの説明もしないで、ひとりで車から降りてしまった。
颯太は慌ててドアを開けて、女に尋ねた。
「ここはどこです？」
「霊園」
「霊園？」
「そうよ」
女は快活に答えた。
「それでは、答え合わせ！　私の目的地はこの霊園でした！」
颯太は呆気に取られていた。
後部座席に座ったケンゾーはまだ体をぶるぶると震わせていた。
「こんな遅い時間に霊園で何をするんですか？」
「そりゃあ、お墓参りよ。私、ずっと用事があって、なかなか来れなかったの。

だからやっとここに来られて嬉しい」
　颯太は女の言葉がうまく理解できなかった。
　用事？　なかなか来られなかった？
　颯太は続けて尋ねた。
「誰のお墓ですか？」
「弟」
　女は手短に答え、手招きした。
「ここまで運んであげたんだから、あなたたちも少し付き合ってくれるよね？」
　どうやらこの霊園は丘の上にあるらしかった。雑木林に囲まれ、あたりは静まり返っていた。街灯の明かりも乏しい。ここで降ろされても、他に行くあてがない。
　仕方なく、颯太たちは外に出て、月明かりに照らされた砂利道を歩いた。女はコンビニで買った大きなビニール袋とあの白い花束を持っていた。
「きっと入り口閉まっていますよ」
「簡単に乗り越えられるわよ」
　案の定閉まっていたゲートを、三人は足をかけて、乗り越えた。
「こんなことして平気ですか？」
「大丈夫、大丈夫」
　女はどんどん夜の霊園の中へ進んでいった。
　颯太はケンゾーが心配だった。彼は先ほどから一言も口をきいていなかった。おろおろと何かに怯えている目をして、歩いている。
　また女の行動も颯太には奇妙に見えた。なぜ人目を憚るように、わざわざ夜にお墓参りをするのだろう？
　小径の真ん中で女はふと立ち止まった。
「これが弟のお墓なの」
　女が指差した先にはシンプルな小さなお墓があった。
「弟はね、十八歳で死んじゃったの。その時、私は二十歳になったばかりだった」
　女は苦しそうな表情をしながら、急に身の上話を始めた。
「日本中のどの姉弟よりも私たちは仲が良かったの。どこでも、どんな時でも、片時も離れずにそばにいた。隠し事もないし、お互い色々なことを語り合った。彼が十七歳になるまで私たちは同じベッドで寝ていたのよ？　それなのに……」
　女の声は今にも泣き出しそうなほど震えていた。
「弟さんは……、なぜ、亡くなってしまったのですか？」
　そのときだった。横にいたケンゾーが突然夢から覚めたようにハッと顔を上げた。そして「おい！」と何やら必死な様子で叫んだ。
「別にどうでもいいだろ！」

だが、颯太はケンゾーに構わなかった。
「弟さんに何があったんですが？」
「弟はね、恋人ができたばっかりだったの。初めての彼女。とっても喜んでた。昔から好きだったんだって。それなのにすぐ死んじゃって……」
「弟さんはなぜ亡くなったのですか？」
「本当にいい子だったの。自慢の弟だった」
涙声の女は、花束とコンビニの袋をそっとお墓の前に置いた。
颯太は袋の中に入っているものを思い出した。彼はゾッとした。
「ねえ、答えてくださいよ！なぜ弟さんは亡くなってしまったんですか？」
「本当に、本当に、私たちは仲が良かったのよ」
女は顔を手で覆って、激しく泣いた。
「ねえ、なんで……」
颯太は絶望に駆られながら、何度も尋ね続けた。